

子どもと自然との良い関係を求めて (H20.9)

船本 浩路

●子どもと川

最近、川で遊ぶ子供をほとんど見かけなくなりました。川が汚れたことが大きな原因ですが、町から少し離れたきれいな川でも見かけません。川ガキが消失してしまったのです。絶滅しつつある日本の川ガキ、レッドデータブックはこのまま放っておくと絶滅する生き物をリストアップしていますが、この中に川ガキを入れるべきではないかという笑い話しがよくでるほどです。なぜいなくなったのか……。余談ですが、川には子供がいない反面、川ガキのなれの果てである川オヤジ(私のような釣をしているおっさん)がいます。しかし、そのうちにこのおっさんもいなくなる心配があります。

これからの子どもたちには川遊びを初めとする自然体験は不要なのでしょうか。テレビゲームをはじめそれに代わる遊び方、楽しみ方が多くあるのかもしれませんが、……。しかし自然と遊ばない子どもたちがこのままどんどん増えていってもいいのでしょうか。

川に限らず、本当の自然を体験させることの大切さが十分理解されていないように思います。子どもにとって自然体験は冒険でもあります。この冒険体験は子供の健全な精神の発達には非常に重要だと児童心理学者は言っています。スイスやドイツでは強い集団になって隣国に侵略されないようにするために子どもに冒険を積極的に勧めるそうです。冒険は事故の心配もありますがそれ以上に重要と考えられているのでしょうか。日本のように事故があった場合の責任を先生や行政に押し付けているようではやがて国は潰れてしまうかもしれませんね。

●再び川へ子どもたちを

いろんなことを教えてくれる川にどうやって子供たちを再び呼び戻すのかを考えてみましょう。まず川の構造と水質に問題がありますね。少なくとも川に降りることができて、手や足を浸けてみたいと思うくらいまでには水をきれいにする必要があります。それともう一つ大きなことは、川は危ないというだけで遠ざけられていることです。発想を変えて危ないものでもちゃんと付き合う方法を教えればそんなに心配はないということを理解してもらうことが必要です。あまりびくびくして危ないことばかり教えたら、たくさんの豊かな富をくれるのにそれを捨ててしまうことになります。すべて防除する発想はひ弱な子どもをつくることになります。安全・安心だけを重視しても子どもは健全に育ちません。

昔は、川での遊び方は子どもの間で年上から年下に教え引き継がれたものですが、今はそれがありません。復活のポイントは川をよく知っているキーマンとなる人が地元が必要です。ある小学校は地域のおじさんに地域を流れる川の生き物調査に協力してもらっています。彼は魚を知ることによって川を汚さない意識が高まればそれが親まで伝わるのではないかと考え協力しています。危険だから近づかないのではなく、危険なものでも付き合いをうまくすれば大丈夫ということを知らせたいとのことです。

私たちのまちの川、石津川を考えてみましょう。右の写真を見て下さい。何の変哲もない写真ですが、私にとっては非常に意義のある写真です。あの汚れた石津川にこれだけたくさん子どもたちが入って川遊びをしています。少し前の石津川をよく知る方にはウソ

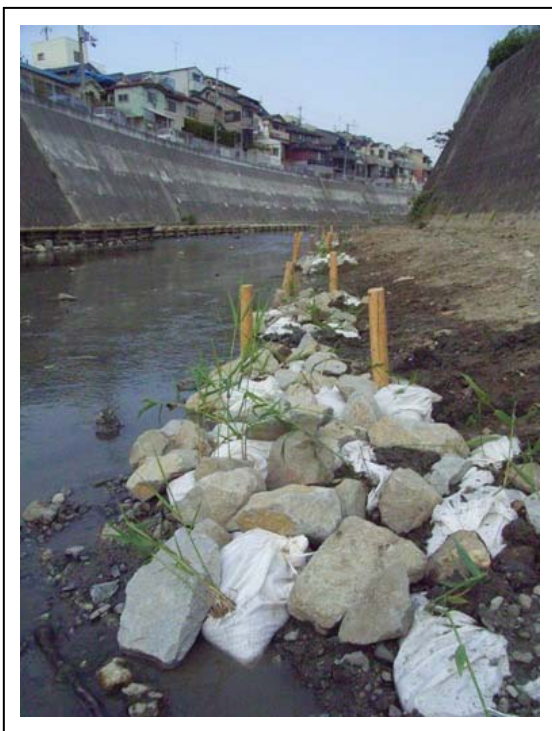


のような光景だと思われるでしょう。平成 18 年の夏の光景です。「子どもの石津川・元年」としたいと思っています。ここまでくるには行政の協力もありましたが我々の仲間である太田さん、西川さん、福田さんなどの地域のおっちゃんたちがサポートしてきたからです。太田さん（堺河川ボランティア



ア) は石津川の生物を継続して調べられ、機会あるごとにその結果を子どもたちに伝えていращやる。彼の調査では、モクズガニやウナギの子どもが中流域でたくさん見つかっています。いずれも海と川を行き来する生き物で、海と川がなんとか繋がっている証拠でもあり、アユへの期待も膨らみます。水質の

回復は COD という理化学的な物差しではまだ見えにくいのですが、生物の種類数が確実に増えてきていることから間違いはないとのこと。また、ホテルそれもゲンジボタルが、石津川の主要な 3 支流の上流すべてで確認できたとのこと。西川さん（カムナプロジェクト）は信じられないことに子どもたちと一緒にヨシ舟を作り海まで下ってしまいました。これには校長先生が清水の舞台から飛び降りる覚悟をして実行を決断されたと聞いています。沿道の大勢の方が橋の上からヨシ舟の下る姿に拍手を送っていたということです。また、チンチン電車も鉄橋の上で臨時停車して応援していたそうです。大阪府の自然環境保全指導員でもある福田さんは植物に造詣が深く、河川敷の植物観察や百済川のヨシ原の再生を指導されています。このヨシ原の再生活動（下の写真参考）は今年で 4 年目になり再生面積も広がってきました。来年は子供たちで育てた石津川産のヨシを 100%使って舟を作るとのことです。



左上、右上写真

平成 17 年ヨシ植え付け作業

左下、右下

平成 20 年のヨシの生育状況

このように太田、西川、福田さん等の精力的な活動で、自然との関わりを取り戻していくためのフィールドができてきました。そして毎年、石津川で遊んだ子どもが確実に増えています。将来、彼らが次の世代に石津川の復活の夢を語り継いでくれるものと期待しています。次世代を担う子どもたちが自らの手で石津川の再生に向けた取組みに参加していくことは、長い目で見た場合、どのような施策・事業よりも意味のあることかもしれません。



●自然に関わってもっと得をしよう！

次に自然との関わり大切さをいろんな視点から理解していただくために 3つの情報を紹介しましょう。まず、最初に「安全・安心だけでは子供は育たない」ということを示したNHK・ETV特集「里山保育が子どもを変える」（平成18年10月28日）を紹介します。この番組は子どもにとっていかに自然との触れ合いが大切であるかをじっくりと時間をかけ取材しており、非常に説得力のある撮影記録と思います。

『千葉県の本更津社会館保育園の5歳児たちは市街地周辺に残る里山の中で年間60日間も過ごしている。自然離れが進む中で、親の自然体験が乏しくなったことも影響してか、子供の遊び方に神経質な親が多い。また、訴えられることもあって教育現場も安全・安心を最優先させる傾向がある。しかし園長の宮崎栄樹さんは「けがをしたり泥だらけになったり、時には友達と喧嘩をしながら遊びに熱中してこそ子供は健全に育つ」と考え、藪や崖ときにはハチやマムシなどの危険も潜む里山で保育をしているという。当初は、ほとんどの保育士たちが「危険すぎる」「時代に合わない」と反対した。しかし、里山で過ごす子供達の変化を見て、反対の声はしだいに消えていった。森は危ない場所である

と同時に楽しい場所でもある。困難を乗り越えながら自信をつけた子供たちの表情は生き生きしてきたという。宮崎園長は「自然の柔らかさ・優しさ・厳しさ・楽しさ・美しさ・不思議とともに反射神経・平衡感覚・ストレス耐性・状況判断力そして仲間と助け合うこと、弱いものを強いものが守るべきことなどの「生きる力」を「森の保育」は子供達に与えてくれます。」と述べている。』

次に「**生命と触れ合い、育てることの大切さ**」を示したものです。凶悪な事件が後を絶ちません。命の重みがわかっていないことが大きな原因です。北海道旭山動物園の園長さんは命の重みを理解させるには、動物に触れて、飼育し、死を経験することが大切であると言っています。そして動物園はその教育を果たす使命があるとの信念で実践されています。『動物とのふれあいを経験させるために幼児をまず椅子に座らせ、その膝の上にスタッフがウサギやモルモットをそっと置き、抱き方を指導する。ウサギに触れる前の幼児にウサギを見せて、「ウサギ、どうだった」と聞くとほとんどの子が「かわいかった」と答える。

ところがウサギを抱いた後で同じように聞いてみると「フニャフニャしていた」とか「あったかかった」「やわらかかった」という答えになるらしい。幼児の行動を観察してみると、多くの子どもが、ウサギを抱え込み、頭を下げて全身でウサギを包み込むらしい。誰も教えていないのに……。その瞬間に命は伝わったのだと考えるとのこと。命は覚えるものでなく、感じるもの。でも、それだけで、命の大切さは伝わらないという。そのためには、命は決して後戻りしないことを知らなければ……。動物は死んでも生き返ると思っている子どもが少なからずいるという。それは、「死」が私たちの生活から遠ざけられてしまったからである。最近では、人は病院で生まれて病院で死ぬので、子どもたちが命の始まりと終わりを実感することが少なくなってしまう。一般に人生の中で身近な死はそんなに多くは経験しない。その中で、命の大切さを心に刻むには、身近な生き物とのふれあいを通して、死までをも体験しなければならないとのこと。愛しているものの死に臨んだ時の心の苦しさが、かけがえのない命だからこそ、大切にしなければならないことを認識する大切で唯一の瞬間なのです』と……。

川の中に入り魚獲りをさせてあげると普段はゲームに熱中している子供たちもイキイキとして目の色が違ってくることを私もたびたび経験しています。その顔は遠い昔の自分とダブってきます。少し安堵感もでてきます。その中に、家で飼ってみたいという子が必ずでてきます。私は飼育を進めます。魚を飼育して観察することはホントに楽しいことですし、水の世界へ想像が広がります。飼育によって生命を奪うことになる場合もありますが、子どもたちの成長のためにいただいた命と考え勘弁してもらいましょう。

次に「**自然の中で遊ぶことでアレルギー体質がなくなる**」という興味あるお

話です。NHK サイエンスアイで放映された内容によると『日本人の 3 人に 1 人がアレルギー性の鼻炎・喘息・湿疹に悩まされていると言われていました。中でも花粉症に悩んでいる人は非常に多いのです。心配なのは若年期から発症するケースが非常に増えてきているということです。

アレルギーは①アレルギー源の増加、②大気汚染、③食生活の変化、④ストレスなどが複雑に相互作用することによって発症すると考えられていました。しかし、最近の研究で、これらの他に生活の中で細菌感染の減少が大きく影響していることがわかってきました。

アレルギーになる仕組みを考えてみましょう。誰の体でもその体内にはマクロファージという免疫細胞があって、これは外部からの侵入者を駆逐する働きをもっています。一方、もう一つの免疫細胞である Th 細胞はマクロファージによって駆逐された侵入者の残骸とくっつくことで外部からの侵入者が何者であったかを認識し、次回からは同じものが体内に侵入しようとした場合にそれを排除するための実行命令を発します。これが免疫反応です。侵入者が花粉の場合であれば、その実行動は花粉を体内に入れなためくしゃみや鼻づまりです。アレルギーは免疫反応が過剰に起こることをいいます。

Th 細胞はアレルギー源が体内に入るとアレルギー源を駆逐する細胞 (Th2 細胞) に変化します。一方、細菌が体内に入ると細菌を駆逐する細胞 (Th1 細胞) に変化します。この 2 種類の細胞 (Th1 と Th2) のバランスが取れていればアレルギーを起こしにくいのですが、細菌に接する機会、言い換えれば自然に接する機会が減ってアレルギー源と接する機会が多い現代社会の環境ではアレルギー源を駆逐する細胞が相対的に増加し、本来の両者の健全なバランスが崩れています。前述したアレルギーを引き起こす 4 つの要因はすべてアレルギー源を駆逐する細胞を増やす環境となります。

ところで、注意しておきたいことは身近な環境に細菌が減ってきているのではありません。今の生活が細菌を排除して細菌に触れる機会を極端に減らしてきているのです。むかしは泥まみれになって、消毒の少ない野菜を食べました。今の子どもは土と触れ合う機会が少ないから細菌に接触する頻度は非常に少ないのです。これからは細菌と人間の関係を見つめなおすことも必要です。しかし、今さら昔のような生活様式はできません。そこで、細菌＝汚いというイメージを払拭して、ある種の細菌はバランスのとれた免疫反応に役立つという考えが大切です。』川で遊ぶことも健康面からも重要であることがお分かりいただけましたか。

●まとめ

私の少年期である昭和 30 年代のわが国は敗戦による挫折からようやく脱し、高度経済成長に向けて走りをはじめたころです。私は堺のまちで育ちました。居

住地域の周辺には空地、野原が散在していました。塾通いのほとんどない子供達は、放課後それらの自然的空間で、野球、鬼ごっこ・虫とり、魚とりなどに興じたものです。そして自覚せずとも、旬の食品、動植物の成長などによって四季の移り変わりを知覚することは容易であり、生物の誕生と死を直接体験することもしばしばあり、命の尊さを自然と身に付けていきました。

しかし現在にあっては、もはや遊びの空間は冷暖房の効いた室内であり、規格化された公園です。都市化の進展に伴う自然環境の減少は子供の「野生」の部分を大きく滅殺することとなりました。これは大きな問題です。というのは決して意のままにならない自然（野生）に向き合うことで我慢をすることや様々な能力を身につけ、多様な生物と接することで命の尊さ、自然の法則や仕組みを理解し、自然の美に触れることによって感性が磨かれ、想像力が養われるからです。

身近な自然との交流は、自然（野生）に興味・関心をもつ第一歩であり、たくましく育っていくための登竜門のようなものです。それができなければ次への展開は望めません。青少年の健全な育成にはなくてはならない体験です。小学校の校長さんが「せめて 6 年間の間に一度でいいから、少々汚れていてもいいから、学校の前の身近な川に下りて魚を触らせてあげたい。」「それはいつまでも記憶に残りいつか役に立つと思う。」と言っていました。また、市内の里山公園で活動されている方たちにその活動目的を聞いたところ、「子どもに里山で自然体験をさせてあげたい。そのお手伝いをしたい。」という返事が非常に多かったです。かつての自然を取り戻したいという願いの奥には子どもが強く、やさしく、たくましく、育ってほしいという思いのあることが感じられました。私は「石津川に鮎を」という目的で河川の環境改善活動を行っていますが、もう一つ子どもと川の良い関係作りを目指す視点も頭に入れなければならないと考えています。

<参考>

石津川の生き物、水質について

<http://www.geocities.jp/ishizuayu/resorcekits/resourcekits.html>